

聖書：マタイ 6：10a

説教題：御国が来ますように

日時：2018年7月15日（朝拝）

主が教えてくださった「主の祈り」の第二の祈りを見て行きます。前回も述べましたように、主の祈りは大きく二つの部分に分けることができます。その前半は神の栄光を求める祈り、後半は私たち人間の必要を求める祈りです。そしてこの順番に大切なメッセージがあるということも申し上げました。私たちの祈りを振り返ってどうでしょうか。ともすると私たちは「神様！」と呼びかけた後、自分の願いごとばかり次々にまくしたててしまう。そうであるなら「主の祈り」に全然学んでいないこととなります。もし私たちが「天にいます私たちの父」を正しく見上げるなら、その方への「賛美」がまず先に出て来ておかしくありません。その方への「感謝」の言葉が溢れてきておかしくありません。そしてこの方のお名前こそが人々の間であがめられることをまず祈って本当です。このような神とその栄光を求める祈りが先に来てこそ、私たちの祈りは正しくセットされ、その後の祈りも正しく導かれます。ある人は「いや、私にそんな余裕はない。私は自分の窮乏を神に告げるだけで精一杯」と言うかもしれません。しかしそのように急いで自分に関する願いを100回繰り返すよりもはるかに大きな益を、神への賛美と感謝から始まる祈りは私たちにもたらしてくれるのです。

これはもう少し実践的に言えば、聖書のみことばに聞くこととセットで祈ることを大切にするということとも言えると思います。私たちは毎日の生活でも個人で聖書を開き、神に祈るデボーションの時間が大切だと教えられています。が、つつい忙しいから、今日は聖書を読むのはパスしてお祈りだけなどと思ってしまうがちです。しかしそのようにして祈る祈りはたいてい自分中心の祈りになっているのではないのでしょうか。よほど聖書の言葉が沢山心に貯えられている人は別ですが、そうでないとただ神に向かって「ああしてください、こうしてください」と人間的な願いをべらべら述べるだけの、全く信仰がない祈りになってしまいます。しかし聖書のことばに開く時、私たちはそこに神を見つめます。毎回必ず恵まれるのではないにしても何らかの神についての真理を心に留めさせられます。そしてその神についての真理の光のもとで、私たちは自分が置かれている状況を新しく捉えるようにと導かれるのです。自分一人の人間的な観点からすれば悩みであり、嘆きでしかなかったことが、実は神の前では恵みであったり、私の霊的成長のための神からのプレゼントであることが見えて来るようになる。そして勇気と平安

を与えられて、祈りつつ取り組んで行くように導かれる。ですから私たちは自分の願い事を一方的に神に祈る祈りはやめて、まず聖書を通してまず神を見上げること、御名を賛美することから始めたいのです。そのような神への賛美また信仰告白から始まる祈りこそ祝福される祈りの基礎です。

さて第2の祈りは「御国が来ますように」というものです。「御国」と訳されている言葉は原文のギリシャ語をそのまま訳せば「あなたの王国」、つまり神の王国のことです。「国」と言うと私たちはアメリカや日本といった地理的な国、領土のことを考えがちですが、聖書が述べる「神の国」とはそういうものではありません。この言葉の基本的な意味は「神のご支配」というものです。神が王として統治する世界のことです。このような神の王国が来ますように！と祈るとは、どういうことを意味するのでしょうか。それは今のこの世界にはそれが無いということです。少なくとも十分な意味では存在していない。ではどういう状態なのか。聖書はこの世は悪魔の支配のもとにあると言っています。この世界は最初に造られた時は神の支配下にありました。創世記に記されているエデンの園はまさに神の国でした。しかし人間は高ぶって神に逆らい、神を王として従うよりも、悪魔の提案を受け入れ、悪魔の指示に従いました。その結果、人間は悪魔の支配下に入ったと聖書は述べています。もちろん神の力の方が悪魔の力よりはるかに上なのですが、人間とこの世界は悪魔の力の下にあるものとなったのです。悪魔すなわちサタンは聖書で「この世の神」とか「この世を支配する者」と言われています。確かに私たちが住むこの世界は神の祝福ばかりが満ちている世界ではありません。色々ところに嘆きがあり、悲しみがあり、叫びがあります。また戦いがあり、争いがあり、落胆するようなことがあり、また死で満ちています。これらは私たちが普段気が付いていなくても私たちが支配しているのは誰かということを示しています。

ところが聖書は、神がこのような私たちの世界に再び神の国を打ち建て、本来の祝福の世界を取り戻すという遠大なご計画を持ち、働いてくださっていると示しています。そしてこの約束が大きな進展を見せたのはイエス様がこの世に来られた時でした。イエス様が公の生涯に入ってまず語られた言葉はこれでした。4章17節：「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」 またこの御国は近づいただけでなく、イエス様とともにこの世に存在し始めたとも聖書は語っています。ルカの福音書17章20節21節：「神の国は、目に見える形で来るものではありません。『見よ、ここだ』とか、『あそこだ』とか言えるようなものではありません。見なさい。神の国はあなたがたのただ中にあるの

です。」 また 11 章 20 節：「しかし、わたしが神の指によって悪霊どもを追い出しているのなら、もう神の国はあなたがたのところに来ているのです。」 このようにイエス様が来られて、その方を信じ、その方に従うところには、約束の神のご支配が始まっているということを聖書は述べています。しかし一方でそれはまだ最後の状態には達していません。やがて神の国、神のご支配が完全な形で成就する日が来ます。それはこの世界の歴史の最後の日です。その時、サタンはついに投げ捨てられ、悪はさばかれ、最終的な神の国、天国が出現します。このことを踏まえて、今日の「御国が来ますように」という祈りはどういう祈りなのか、3つのことを見て行きたいと思います。

第一にこれは神の国・神のご支配が私自身の心と生活に拡大するよという祈りです。私たちは「御国が来ますように」と祈る時、天国が遠くから飛んで来るイメージで考えがちかもしれません。しかしそうではありません。私にとってこの御言葉は特に思い出のあるみことばの一つです。前に橄欖に書きましたが、ある夏季休暇中の日曜日、私は家族とともに福島の教会で礼拝に出席しました。その日の説教箇所はまさにこのマタイの福音書 6 章 10 節でした。私はその時、ここから語られるのは、人々に福音を伝えて信じる人が多く起こされることによって神の国が広がるように、皆さんで祈り、取り組みましょう！というメッセージだろうと予想しました。ところがそこで語られた中心メッセージは、この祈りを祈る者はまず自分の心から始めなければならない、あなたの心の中に神の国が一層広がることを求めなければならないというものでした。その時の私は、明日で夏休みが終わるという時にありました。それまでの数日間、私はいつものように夏休みを楽しみました。石巻の実家に帰って家族と交わり、美味しい海の幸も楽しみましたし、海水浴に行ったり、東北の山の中の温泉に浸かるなど、普段できないことを色々しました。ところがその日に私の中にあつた思いは、何か自分はまだ十分リフレッシュされていない。色々楽しんだはずなのにまだ何か足りない。こんな状態で明後日からの働きに戻れるのか。何かもっと楽しいことをしなければならないのではないかという思いでした。そんな時、神の御国・神のご支配はあなたの心から始まらなければならないと聞いたのです。私はその時、自分の心の中に空虚感があることに気がつかされました。私は人々に福音を伝えて、神の国が進展するために献身していたつもりでしたが、果たしてそのように取り組む自分自身の中にどれほど神の国は広がっているのか、自分がこの神のご支配に生きる喜びをどれだけ大切にしているのかと問われたのです。それがいつしかおろそかにされていたので、私の内側に天国にたとえられる喜びが失われつつあつたのではないのか。ローマ書 14 章 17 節：「神の国は食べたり飲ん

だりすることではなく、聖霊による義と平和と喜びだからです。」 私たちがイエス様と交わり、イエス様に従い、イエス様がもたらしてくださっている神のご支配に生きるなら、私たちは今ここで天国の祝福と喜びに生きることができる。私に必要なのはさらなる海の幸、さらなる温泉、さらなるレジャーではなかった！まず自分自身が神のご支配にしっかり生きること。そこにこそすべてに勝る天国を先取りする喜びがあり、信仰のいのちがあり、また人に伝えるエネルギーのもとがある。その時、私は悔い改めと同時に、これからどう取り組んでいけば良いのか、大きな希望の光をいただき、非常に救われた気持ちになったことを思い起こします。夏季休暇は明日で終わりになるが、これからの働きの日々においても、神とともに歩む御国の生活にこそ真の満たしがあり、また真の休み・リフレッシュがあると分かったのです。もちろんだからと言って夏休みはいらないし、夏休みの楽しみもいらないということではありません。それらは感謝し、楽しんで良いのです。しかし私たちの真の幸い、天国はどこにあるのかということを見間違っはならない。私たちはもっともっと自分自身の内にこの神のご支配、御国が確立されることを祈り求めるべきではないでしょうか。「御国を来させたまえ」と祈る時、まず自分自身の内に神の国が広がることを求めるべきではないでしょうか。

2つ目にこの祈りは、人々の間に神のご支配が広がって行くようにという祈りです。神の国に生きるための道は、イエス様が言われた通り、悔い改めて福音を信じることです。イエス様の十字架は、私の罪の解決のために神がなされたことだと信じ、その方により頼むことです。その信仰を通して私たちの罪は赦され、サタンは私に対して支配権を持ってなくなり、代わって神の祝福の支配が私に臨むようになる。この神の国の宣教の一番の主体者は神ご自身です。神が御子イエス様を遣わしてこのことをなされています。しかし救いにあずかった私たちも、この宣教という神の働きに参与するように招かれています。ですからこの「御国が来ますように」という祈りは教会の宣教の祝福と成功を祈る祈りでもあります。そしてもちろん「教会の宣教」と言う時、私たちは自分を抜きにして考えることはできません。私たち一人一人がイエス・キリストの福音を人々に告げ知らせ、また生活をもって証しすること。そうして主の手足となって神の宣教の働きにあずかること。こうして御名をあがめる人々が増えて行くように、神のご支配に喜びをもって立ち返る人々が多く起こされるように、そして神の国が益々進展・拡大して行くことを求める祈りなのです。

最後3つめに、これは御国の完成を待ち望む祈りです。これまで見て来ましたように、

私たちはこの地上で神の国の祝福を味わい始め、そこに生きることができますが、しかしそれはまだ最終状態ではありません。やがてイエス様は来られて、この御国が完成する日が来ます。それはどんなに素晴らしい世界として聖書に示されているでしょうか。ヨハネの黙示録 21 章 3～4 節：「私はまた、大きな声が御座から出て、こう言うのを聞いた。「見よ、神の幕屋が人々とともにある。神は人々とともに住み、人々は神の民となる。神ご自身が彼らの神として、ともにおられる。神は彼らの目から涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、悲しみも、叫び声も、苦しきもない。以前のものが過ぎ去ったからである。」 この世で私たちは多くの悩み、悲しみ、困難に囲まれ、日々うめき、叫び、涙しています。しかしやがての栄光の御国にはそのようなものは一切ありません。それらが全く過ぎ去った神の祝福だけが支配する世界が約束されています。また私たち自身、聖められてキリストに全く似る者にされるとヨハネの手紙第一 3 章に記されています。イエス様を信じて罪の赦しを受けても、最後の日まで罪との戦いが私たちにありますが、やがての日には罪の痕跡すら私たちから拭い去られて、神がご計画された人間の本当の状態、神を映し出す栄光の状態に達すると聖書は約束しています。そしてその御国での生活が、ヨハネの黙示録の 22 章 1～5 節にこうあります。

「御使いはまた、水晶のように輝く、いのちの水の川を私に見せた。川は神と子羊の御座から出て、都の大通りの中央を流れていた。こちら側にも、あちら側にも、十二の実をならせるいのちの木があつて、毎月一つの実を結んでいた。その木の葉は諸国の民を癒やした。もはや、のろわれるものは何もない。神と子羊の御座が都の中にあり、神のしもべたちは神に仕え、御顔を仰ぎ見る。また、彼らの額には神の御名が記されている。もはや夜がない。神である主が彼らを照らされるので、ともしびの光も太陽の光もいらぬ。彼らは世々限りなく王として治める。」 これを見て、私たちはどうしてこの御国が来ることを日々熱心に祈らずにいられるでしょうか。これは私たちに絶えず希望を与える祈りです。この御国の約束は神から出たものですから必ず実現します。神はそのために私たちとその働きを用いてくださいますが、だからと言って私たちにこれがかかっているわけではありません。神がご計画をし、神がこれを完成に至らせてくださいます。ですから私たちはこの祈りを祈るたびに、神の約束に目を高く上げさせられて、励まされるのです。この地上ではなお色々な悲しいこと、辛いこと、苦しいこと、涙することがありますし、すでに到来している神の国の祝福も時によく見えなくなり、かすんでしまうように思われる時もあります。しかし栄光の御国は来るのです。神が来たらせてくださるのです。

私たちはこの御国を待ち望み、熱心にこの祈りをささげる者でしょうか。それともこの世の国に安住し、この世のことばかり追い求めている者でしょうか。神の国、神のご支配こそ、どんな支配にもはるかに勝るものであり、私たちを深く生かすものです。この神のご支配は私たちのために愛する一人子までささげてくださった方の愛に満ちたご支配です。また私たちを造ってくださり、私たちの必要をすべてご存知である方のご支配です。私たちはただ自分の地上の生活のために、ああしてください、こうしてください、と祈るのではなく、まず「御国が来ますように！」「最終的な神のご支配が実現しますように！」と祈りたいと思います。そしてその約束の日に目を上げて、今日、神に従い、神にご支配していただく生活へ、そして天国を先取りする喜びの生活を人々に宣べ伝え、いよいよ神の約束が果たされる栄光の日へと向かう私たちの希望に満ちた信仰の歩みへ進んで行きたいと思います。